

平成 22 年 5 月 28 日現在

研究種目：基盤研究 (C)
 研究期間：2007～2009
 課題番号：19520304
 研究課題名 (和文) 戦国秦漢期の諺・歌謡・文学作品と物語—「テキスト」を核とした「語り」の展開—
 研究課題名 (英文) The relation of proverbs, songs, literary works and stories in the Warring States and the Qin-Han era China : the development of “narrations” which is formed around “core texts”
 研究代表者：谷口 洋 (TANIGUCHI HIROSHI)
 奈良女子大学・大学院人間文化研究科・准教授
 研究者番号：40278437

研究成果の概要 (和文)：『史記』の中の歌は、そこに登場する人物の実際の作品というよりは、その人物を取り巻く物語の一要素として、物語を悲劇に導く鍵の機能を果たしている。また前漢までの文学作品は、作者が確実か否かにかかわらず、作者をめぐる後人の物語の中で伝えられる。すなわち、ある「テキスト」は他者の「語り」の中で伝承されるのであり、このような状況に多少とも変化が生ずるのは、前漢末期以降のことである。

研究成果の概要 (英文)：Songs in *Shi-ji* are not so much the real pieces of the singers as the constituents of the tales concerning him/her, and they are the keys to the tragic ending of stories. Literary works no later than the Former Han era were handed down in tales about their writers, which were told by posterity, whether the authorship of these writers were reliable or not. We can say a “text” were handed down in a “narration” told by other persons. Only after the last years of the Former Han, the state of affairs gradually changed.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	900,000	270,000	1,170,000
2008 年度	500,000	150,000	650,000
2009 年度	500,000	150,000	650,000
総計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野：中国文学

科研費の分科・細目：文学・各国文学

キーワード：歌謡 賦 物語 伝承 作品 『史記』

1. 研究開始当初の背景

本研究の対象となる先秦の文献と語りとの関係については、すでに貝塚茂樹氏（「論語の成立」「国語に現れた説話の形式」、『貝塚茂樹著作集』第5巻、中央公論社、1976所収）、小南一郎氏（「語から説へ」「中国文学報」50、1995、pp.1-9）らにより、重要な知識や教訓を、物語を通して伝承する語りの場の存在が指摘されている。

こうした口頭の語りは、一般に流動的・拡散的なものと考えられやすい。しかし、諸子百家の文章において、それ以前の古語や古文獻が頻繁に引用されることにもうかがえるように、語りは、実は、その核になるものとして、代々固定した形で伝えられる「テキスト」を必要としていたのである。ただしこの場合の「テキスト」は、実際には必ずしも文字化されたものに限定されず、たとえば諺のよう

に、口頭で伝わるものであってもよいが、形が厳密に決まっていることが求められる。

この点について、本研究代表者は、滔々と歴史故事を語る『国語』と、諺的な断章の多い『論語』という、全く異なる文体を持つ2つの書物が、ともに、物語を通して教訓を伝える「語」の場に由来するものと考えた（『国語』『論語』における「語」について）「日本中国学会報」50、1998、pp.1-14）。また、戦国諸子の中でもとりわけ弁論とのつながりの強い『孟子』にあっても、その核には『書』をはじめとする「テキスト」があったこと、一方、「弟子たちによって「孟子曰」それ自身が格言化され、いわば新たな「書」となっていた」ことを論じた（『左傳』『孟子』にみる文献と語り」、小南一郎編『中国文明の形成』、朋友書店、pp.161-193、2005）。

このように、「語り」は「テキスト」をめぐって紡がれ、「テキスト」は「語り」によって伝えられるという関係は、諺だけでなく、『詩経』『楚辞』をはじめとする古代歌謡の伝承についてもあてはまる。本来歌謡であった『詩経』は、いったんその本来の基盤を離れてテキスト化されると、「断章取義」という形で別の新たな語りに取り込まれるか、小序にあるような歴史説話と結合されるかなければ伝承され得なかった。『楚辞』は、屈原の悲劇と重ね合わされる中で文献化されたし、『史記』に載せる項羽や劉邦の歌は、彼らの伝説の欠くことのできない一部分として伝えられる。

歌謡ばかりでなく、漢代の辞賦作品も、たとえば賈誼の作品は、彼の悲劇的生涯と結びついた形で『史記』に収められた。『西京雜記』に載せる梁王のサロンでの作や、司馬相如「長門賦」なども（作品の真偽は今ほ措く）、説話的伝承の衣をまとっている。

研究代表者は、国際辞賦学学術研討会における研究発表（1996年台北、1998年南京、2001年福建、2004年四川）において、本来語られるものであった辞賦と、文献とのかかわりを追いながら、諸子や『史記』等の文献と語りとの関連にも注意を向けてきた。固定した形を持つ「テキスト」と、それをとりまくように展開する物語とをあわせて研究する本研究の視座は、研究代表者自身のこれまでの研究を総合するものである。

2. 研究の目的

本研究は、戦国秦漢期の諺や、『詩経』『楚辞』等の歌謡、漢代の辞賦などの文学作品が、常に物語と結びついた形で伝承されてきたことに着目し、そこに諺・歌謡・文学作品などを核とした語りの存在を考えることによって、中国古代文学の研究に新たな視点を提供するものである。

本研究では、諺・歌謡・文学作品などの「テ

キスト」が、「語り」の中でどのように生かされ、伝承されていったかを究明する。その際、「テキスト」と「語り」との関係に関する一般的法則の発見に努める一方で、「テキスト」の性質による機能の違いをも明らかにする。大まかには、諺を核とする教訓的な語りから、文字テキストを核とする学としての語りへ、また歌謡を核とした歌物語的なものから、作者の知れる作品を核とする伝説としての語りへ、といった展開が考えられるが、これを具体的な事例によって究明してゆく。対象としては、「テキスト」を最も豊富に引用する『史記』を主とし、その他の先秦兩漢の文献を補助的に活用する。

本研究の特色は、古代歌謡・辞賦作品・諸子文献・『史記』など、これまで別個に研究されてきた対象について、統一的な視座を提供することである。諺・歌謡・辞賦のような核になる「テキスト」と、それを取り囲む「語り」という図式は、戦国秦漢期の文献にはかなり広く見られるものであるが、これまでの研究では、諺はほとんど注目されず、歌謡や辞賦も、物語と切り離されて研究されてきた。

古代歌謡のうち、『詩経』や『楚辞』については、近年の国内のものに限っても、民俗学的方法を推進した家井真氏の『詩経の原義的研究』（研文出版、2004）や、出土文物を駆使した石川三佐男氏の『楚辞新研究』（汲古書院、2002）などの研究が現れた。いずれもそれぞれの文献を、それが生成した時代の文化的背景のもとに返し、その原義を追求しようとするものである。このような方向をかりに「古代学」的方法とよぶなら、文献が文献として成立した後に、どのように受容されていったかという問題意識を、「古典学」的方法と名づけてそれに対置することもできよう。しかし、「古代学」的方法が、近年における考古学的発見をも基礎として、長足の進歩を遂げつつあるのに対し、「古典学」的方法のうち、戦国秦漢期を対象とするものは、それにふさわしい展開をいまだ見せていないように見受けられる。それは、おそらく、この時期の「古典」が、物語の中でこそ伝承されたという事実が見落とされているからではないかと思われる。

これまでの研究においては、歌謡や辞賦にまつわる物語は、「テキスト」を読み解くための資料としての扱いしか受けず、また、歌謡や辞賦そのものも、しばしば、物語によって指示された「作者」と「歴史的背景」によって制作されたものと解されてきた。たとえば、『史記』における項羽や劉邦の歌を、実際に項羽や劉邦が、そこに述べられたような状況の下で作ったかのような解釈がされてきたのである。しかし、「項羽本紀」全体の物語性を考慮すれば、これらの歌が物語の一部として伝承されてきたことは明白であり、

ならば歌自体の解釈も、当然更改されねばならない。おおよそ前漢までは、「テキスト」と「作者」の関係は、後の時代のように自明ではなかったのである（この点がかつて、『客難』をめぐって）、『中国文学報』43、pp. 1-51、1991 において、東方朔の「作品」を例に論じたことがある）。

古くから伝えられた「テキスト」を核に、新たな「語り」が紡がれる過程それ自体に注目する本研究は、いいかえれば、「古代」が「古典」に結実する過程を究明するものであり、それは「古典学」的立場をふまつつも、「古代学」の成果を最大限に活用する。このことにより、古代文献の研究を真の意味において完成するとともに、古典学、ひいては古典そのものにも、新たな生命を賦与することができるかと確信するものである。

3. 研究の方法

(1) 『史記』における歌謡と物語を対象とする個別の具体的研究

『史記』は先行する春秋戦国期の文献に依拠したものであり、諺・歌謡・先人の作品を大量に引用する。同時に、当時の語りの実状を反映するとみられる箇所もあり、本研究にとって、最も豊富にして有力な情報をもたらすものである。

『史記』には物語的構成を持つ巻が少なくない。また『史記』には、項羽の「垓下歌」、劉邦の「大風歌」など、いくつもの歌が引かれている。小川環樹「風と雲」（初出は『東光』2、1947）や吉川幸次郎「漢の高祖の大風歌について」（初出は『中国文学報』2、1955）など過去の研究においては、作者とされる項羽や劉邦とのかかわりが注意されてきたが、これらの歌は、実際にはむしろ項羽と劉邦をめぐる伝承の中で成長してきたと見られる点がある。司馬遷自身が「長老」を取材源の一つとしたと言明している（五帝本紀賛）ように、『史記』には当時の口頭伝承の姿をしのばせるところがあるが、項羽・劉邦伝説のように歌を伴うものには、口頭伝承の世界観がより強く反映している。この点についての基本的な考え方は、記念司馬遷誕辰 2150 年学術研討会（陝西師範大学、2005 年 8 月）においてすでに口頭で発表しており、本研究においてそれを発展させる。

また、歌謡と同様、形の決まった言葉として、「語り」の中核となる「テキスト」としての機能を持っていた諺について、歌謡の場合との共通点や相違点について考察を行う。

(2) 辞賦文学とそれにまつわる物語を対象とする個別の具体的研究

『史記』における歌の伝承の問題は、『史記』が屈原・賈誼・司馬相如らの辞賦作品を収録することに照らせば、戦国秦漢期における辞賦文学の流伝という問題にも直結する。

『史記』屈原賈誼列伝に収められる屈原や賈誼の作品が、彼らの悲劇的生涯にまつわる伝説に伴われていることにもうかがえるように、早期の辞賦作品は、常に伝説に包まれて伝えられてきた。『文選』などで賦序として扱われているものは、本来それが収められていた『史記』などの史書の地の文であり、それも実際には、辞賦作品をめぐる伝説の一部分と見るべきものである。賦序はこれまで、作品を読むための資料として、その史実性のみが問題とされてきたが、むしろその物語的内容が注意されるべきであろう。本文と作者名が固定した作品としての「テキスト」も、歌謡と同様に、より流動性の大きな「物語」の中にはめ込まれて伝承されたのである。

しかしこのような状況には、後漢にはいるとようやく変化が現れ、後漢後期から魏晋にかけての辞賦には、明らかに作者自身の手になる賦序が急増する。それはおそらく文学テキストの整備や別集の編纂の始まりと関連しており、「テキスト」の伝承のあり方の変化を反映していると考えられる。

以上の研究により、戦国から両漢を経て魏晋に至るまでの時期に、諺・歌謡・文学作品など各種の「テキスト」が、物語の中での伝承から、書物としての形を持った伝承に推移してゆくさまを究明する。

4. 研究成果

(1) 『史記』における歌謡と物語について

この点に関する研究は、論文『史記』にみえる秦末漢初の歌と伝説—荊軻・項羽・劉邦・呂后をめぐる歌物語（後掲〔雑誌論文〕③）に結実した。

当該論文では、はじめに、『史記』の中の歌謡でも最も人口に膾炙した項羽の「垓下歌」と劉邦の「大風歌」の解釈史を概観し、前近代の解釈はもとより、研究史に残る論争を通して今なお影響力を持つ吉川幸次郎や桑原武夫の解釈も、これらの歌を項羽・劉邦その人の「作品」とするナイーブな見方に立って、作者中心主義的な観点から分析していることを指摘した。さらに、これらの歌を伝承文学として見るべきことを論じた白川静もまた、『史記』全体を司馬遷の「作品」と見る別の次元の作者中心主義から脱却できていないこと、1980 年代以降それとは異なる観点が提示されたものの、未だ全面的に展開されていないことなどの問題を指摘した。

これに対し論者は、先秦から漢初にかけての歌謡は、『詩経』『楚辞』に収められたものを別にすれば、歴史文献や思想文献において、故事と結びついた形で現れること、そしてそこに強い情緒が表現されることに注目する。

『史記』の場合、「諺」や「語」が、しばしば論贊において、ある意見や感慨を述べるために、太史公によって直接引用されるのに対

し、歌は、常に歴史故事の中において、その登場人物によって歌われる。そこには、劇的な感情が極点に達した場面で登場人物が歌を歌って涙を流すという型が見られ、歌そのものも、自らの身の上を語ってまなならぬ運命を嘆く「嘆き節」というべき類型に属するものが多くを占める。さらに、秦末漢初において歌を残しているのは、荊軻・項羽・劉邦やその周辺の人物であり、いずれも当時の大事件に関わり、劇的起伏に富む伝承を残している。すなわち、秦末漢初の大変動は、それに関わった人物の歌を交えて、極めてエモーショナルな物語として語り伝えられていたのである。

当該論文では、以上のことをふまえ、『史記』における荊軻の秦王暗殺未遂、項羽と劉邦の対決、さらには劉邦亡き後の劉氏と呂后との確執などの記述を、歌を交えた物語として分析した。その結果、歌が、物語の節目において、登場人物の秘められた心情をあらわにすることを通して、滅亡の悲劇への扉を開き、滅びゆく人物に光を当てる機能を果たしていることを明らかにした。

(2) 辞賦文学とそれにまつわる物語について

この点に関しては、まず漢代の辞賦を対象として、国外と国内で計2件の学会発表を行い（後掲〔学会発表〕③および②）、その内容を学術論文として公表した（〔雑誌論文〕④）。その成果をふまえて、先秦の文学をも視野に入れ、「テキスト」とその伝承についての総括的な論を構築すべく、新たに学術論文を発表し（〔雑誌論文〕②）、さらにその続編として、後漢から魏晋にかけての辞賦の伝承に関する研究を発表した（〔学会発表〕①および〔雑誌論文〕①）。よってここでは、〔雑誌論文〕②および①の内容を中心に報告する。

本研究では、辞賦文学の伝承について考えるにあたって、賦にしばしば附される序に注目した。文学作品に序を附すことは特段珍しいことではないが、前漢までの序は、みな後から附されたものであり、自序を附すことは後漢になってから始まり、後漢末以降普遍化するが、そこには、文学とその伝承のあり方に起こった大きな変化が反映している。

自序を持つ文学の対極に位置づけられるものとしては、古代歌謡を想定することができる。歌謡は、本来ある特定の場において、そこに居合わせる人の中で直接に伝えられるものであった。『詩経』のように、それらがテキスト化され、序までつけられるというのは、歌謡が本来の場を離れ、経学者たちによって新たな意味づけがされたことを示す。その際多くは、小序にみられるように、詩を歴史故事と結びつけるという方法がとられた。『楚辞』もまた、本来の巫祝の伝統から離れ、屈原という歴史上の人物の悲劇と結び

つくことによって伝えられた。はじめから古代的な伝承の場になかった漢代の文学、たとえば賈誼の賦なども、同じように、作者をめぐる後人の物語の中で伝承されたのである。

一方、古代の宮廷において、王の周囲で、警史などの伝承技法の保持者たちによって行われていた営みは、極めて変質した形ではあるが、宋玉や枚乗の賦にその名残をとどめている。ただしそこでは、古代の王と警史との関係は、戦国的な主客の関係に置き換えられている。司馬相如の賦も、主君に諫言する客としての行動から生み出されたと一応は見なす。ただし相如は、現実の行動においても、作品の表現においても、すでに客としてのあり方から逸脱しており、そこに表現者としての自覚をみる意見もないではない。しかしそうした自覚はついに表明されることがなく、結局相如の作品も、賈誼の賦と同様に、後人の物語の中で伝承されることになる。

こうした状況に変化が生ずるのは、前漢末の揚雄からである。揚雄は、賦をはじめとする自作を大量に引用した自序を著し（『漢書』揚雄伝はこれに依る）、自らの生き方を示そうとした。揚雄自序は、作者をめぐる物語という、前漢に普遍的であった枠組みに依拠したものではあるが、それを作者自身が語った点で、決定的な変質といえる。しかもその中では、賦を通じた諫言、すなわち主客関係の中での文学というあり方が否定されている。また自作を大量に引用するそのスタイルは、序のついた自選集としての側面をも持つ。それは、同時代の劉向父子が、辞賦を作者別のテキストに整理し、後人の語る物語から切り離した行為にも通ずる。前漢までの文学が附与されてきた暗黙のコンテキストは、ここに清算されたのである。

こうして、後漢の賦家は、自作のコンテキストを自ら構築する必要に迫られ、またそうする機運が生まれた。ここに自序を附すことが始まる。ただし、後漢初期にあつては、自序がつくのは、著述としての意図と内容をもつ作品に限られ、個人的心情を述べた作品には序がつかなかった。自序が普遍化するのには後漢後期からであるが、それは、『詩経』『楚辞』を含む文学テキストが整備され、書かれたテキストを読むことを通じて作品を受容するあり方が普遍化した状況を反映しているのである。

建安期以降、集を編むということが始まると、賦序はその中で一つの制度として確立する。賦序が確立すると、今度は序自体が本文と相補的に機能する一つのテキストとしてはたきはじめ、晋代にいたると、そのことを自覚して書かれたとみられる充実した賦序が現れるようになるのである。

(3) 成果の位置づけと今後の展望

本研究は、ある形を持った「テキスト」が、物語の中で伝承されるという点に着目したものである。今回、『史記』の歌と歴史物語、および辞賦とそれを取り巻く作者の物語という、異なる対象においてそれが成果を収めたことは、「テキスト」を核とした「語り」という枠組が、中国古代文学を考える上で極めて汎用性の広い有効な視点であることを、改めて確認させるものといえる。今後は、この視点を、たとえば戦国諸子の書物などにも広く応用し、中国古代における物語的伝承の問題を統一的視座からとらえることが期待される。

さらに本研究では、文学研究においてしばしば自明のものとして扱われてきた「作者」という概念に対し、根本的な問題提起が行われた。『史記』の歌については、それを登場人物が実際に歌ったものとするナイーヴな見方は、素朴な鑑賞ならともかく、研究としてはもはや通用しないことが明らかになった。このことは、『史記』の文学研究における物語研究の重要性を示すとともに、この時代の歌謡研究の方法論について再考を促すものともなる。

また、前漢までの辞賦については、後世の「作者」の概念を安易に当てはめられないということも明らかになった。もちろんそのことは、前漢までの作品に附された「作者」の名が全て疑わしいということの意味するのではない（たとえば賈誼の作品が後世の偽作であるということにはならない）。とはいえ、ともすれば作者の認定や作品の真偽が第一義的問題になりがちな中国古代文学研究のあり方（そしてことは文学作品に限らない）に対し、重要な反省を迫るものであることは疑いない。

なお、本研究では十分にふれられなかったが、後漢以降賦に自序がつけられ、作者の意識が形として現れるようになってからも、作品が後人の物語の中で伝えられるという状況は、決してなくなったわけではなく、むしろ魏晋南北朝以降においても、相当の普遍性を持っている。後世の詩話なども、そうした視点で捉えることが可能だろう。本研究の今後の展開として、「テキスト」をとりまく「語り」という視点を通時的に展開することも、豊饒な可能性を秘めた方向として考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

- ①谷口 洋、漢末魏晋における賦序の盛行—文学テキストの整備と「文学の自立」、六朝学術学会報、査読有、第11集、2010年、pp. 1-16
- ②谷口 洋、賦に自序をつけること—両漢の

交における「作者」のめざめ、東方学、査読有、第119輯、2010年、pp. 22-39

③谷口 洋、『史記』にみえる秦末漢初の歌と伝説—荆軻・項羽・劉邦・呂后をめぐる歌物語、中国文学報、査読有、第78冊、2009年、pp. 1-53

④谷口 洋、試論兩漢“賦序”的不同性質、済南大学学报(社会科学版)、査読有、2008年第2期、2008年、pp. 29-35, 91

[学会発表] (計3件)

①谷口 洋、漢末魏晋賦序的興旺—文学文本的整理・“作品”の確定及其影響、第8屆國際辭賦学学術研討会、2009年11月7日、雲南大学(中国)

②谷口 洋、漢代の賦の序について、六朝学術学会例会、2007年9月15日、二松学舎大学

③谷口 洋、試論兩漢賦序的不同性質、第7屆國際辭賦学学術研討会、2007年8月11日、西北師範大学(中国)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

谷口 洋 (TANIGUCHI HIROSHI)

奈良女子大学・大学院人間文化研究科・准教授

研究者番号：40278437

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：